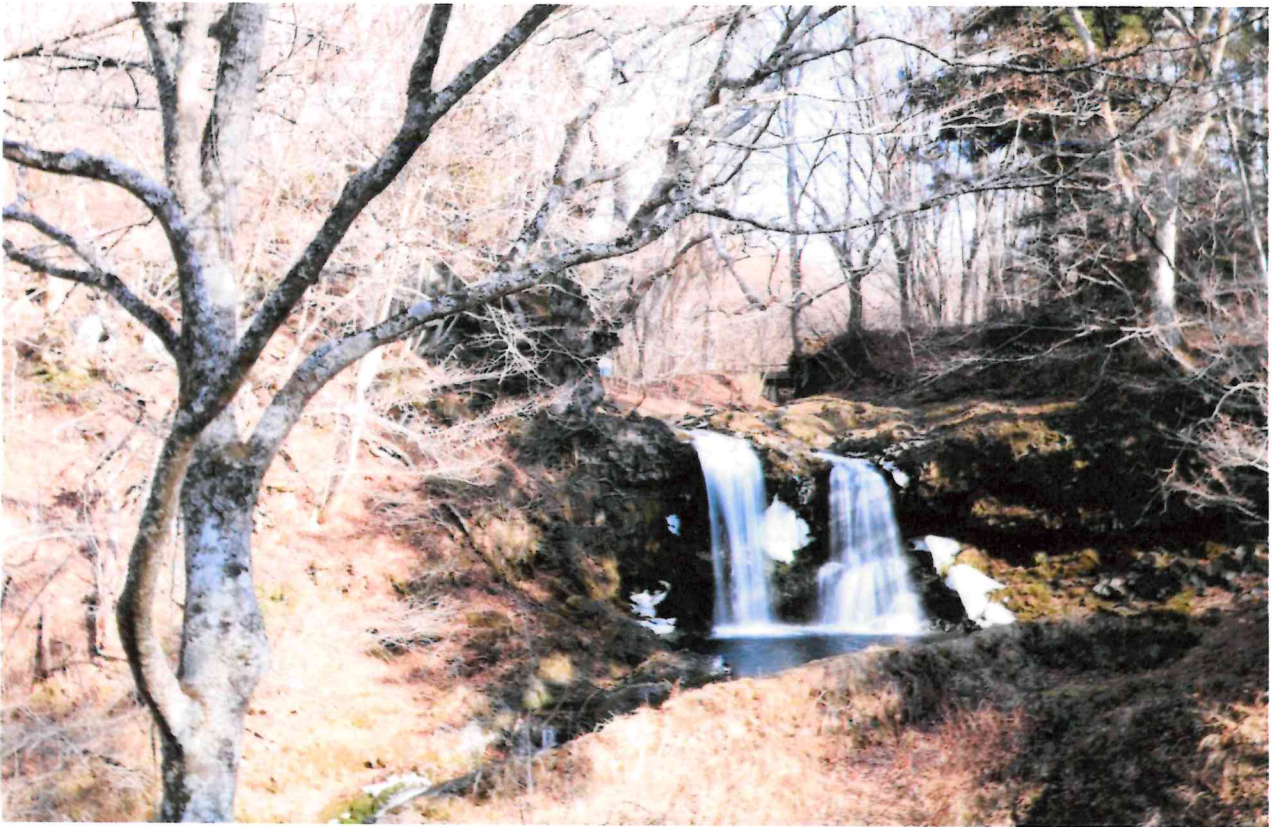


2024年度

事業報告



忍野村 鐘山の滝 photo by endou

社会福祉法人 しあわせ会

白州いずみの家

目 次

全体目標報告	1
ケース会	2
生活支援グループ	4
日中活動グループ	5
看護部	7
調理部	8
地域交流担当	9
人権擁護委員会	10
安全管理委員会	11
プロジェクトP	13
自治会	14
相談支援事業	15

＜基本理念＞

知的障害をもつ人たちが、自分で選び、自分に合った生活を送れる場所を用意して、それぞれの個性に合わせたサポートをすることで安心してそれぞれの可能性に挑戦できる施設づくりをします。

また、仕事したり、余暇を楽しんだり、身の回りの基本的な動きを覚えることを支援して生活の質を高めます。あわせて、施設の中に閉じこもることなく、地域との交流を深め、利用者が社会に広く参加できるよう配慮するとともに、地域の人たちが気軽に利用できる施設づくりをします。

＜運営方針＞

1. 利用者が施設の主人公であり、そのことが何よりも大切にされる施設づくりをします。
2. 利用者が安心して生き生きとした生活を送れるように、障害や年齢・個性・健康状態などに合わせて、家庭的な生活空間をつくります。
3. 利用者の成長と充実した生活をサポートし、生活の質を高めるとともに、日常生活での自立、社会への自立とつなげます。
4. 地域とのつながりを大切にし、利用者が地域の中で積極的に活動できるよう働きかけるとともに、施設のもつ機能を誰もが気軽に利用できるようにします。

* 全体目標報告 *

令和6年度は、利用者の権利擁護を最優先課題と位置づけ、虐待防止および身体拘束の適正化を推進するため、外部講師を招いた研修ならびにミニ人権研修を実施した。併せて、いわゆるグレーゾーンの検証および接遇マナーの向上にも取り組んだ。利用者の高齢化に対応すべく、介護・ケア技術の向上に努めるとともに、マンツーマン対応の増加に伴う業務負荷の課題に対しては、業務フローの見直し、ICTの活用、役割分担の再構築等により対応を図った。施設行事や日常活動に関しても、利用者一人ひとりの状態や希望を踏まえ、個別対応を重視した運営へと移行した。人材育成においては、職員研修の充実を図るとともに、職員間の円滑なコミュニケーションを促進し、立場に関わらず意見を共有できる組織風土の醸成に努めた。また、特定技能実習生の研修制度整備および外国人職員の育成にも注力し、人材確保に向けて関係機関への直接訪問等の取り組みを実施した。新規事業として検討を進めている児童発達支援事業については、法人全体で設立準備を本格化させ、事業計画の策定、人材確保の可能性調査、財務シミュレーション等を実施した。加えて、福祉制度の変化や報酬改定への対応として、経営の効率化、ICT導入、補助金・助成金の活用など、安定的な施設運営を図るための取り組みを推進した。以上の取り組みを通じて、利用者に寄り添った質の高い支援の提供と、職員が安心して働くことのできる職場環境の整備を目指し、時代の要請に即した柔軟な施設運営に努めた。

1. 年間目標

a. 利用者のニーズに寄り添ったサービス提供

今年度は、利用者のニーズに応じた支援に取り組んだ。特に、高齢化に伴う安全面や健康面への配慮を重点的に進め、食事形態の調整や運動量の確保などを実施した。支援内容が本人の希望にそぐわない場面もあったが、利用者との話し合いや職員間での協議を重ねることで、適切なサービスの提供に努めた。

また、虐待防止および身体拘束の適正化については、定期的な会議や聞き取りを通じて対応を行った。全体会議では情報共有を図り、いわゆるグレーゾーンの支援についても積極的に協議を進めた結果、職員の意識向上と支援体制の強化につながった。

b. 利用者の実状に沿った日課と活動の充実

高齢化をはじめ、利用者の状況が日々変化する中で、これまで通りの支援や活動の継続が難しくなっている。そうした状況を踏まえ、今年度は支援の質を確保するため、業務や活動の見直しを進めてきた。業務の省力化・合理化を目指して取り組んできたが、十分な成果には至らず、次年度に向けて引き続きの課題となっている。

c. 高齢者支援に関わる専門的技術の習得

高齢化対策として、高齢者支援の技術習得には数年前から積極的に取り組んできた。これまでに、移乗動作の練習や歩行訓練、食事形態の調整などを実施してきた。しかし、人員不足の影響もあり、理学療法士(PT)の配置が難しく、リハビリ訓練の充実には至っていない。今後も引き続きの課題である。

d. 人材を定着させる多様な取り組み

業務の削減は、引き続きの課題である。職員間のコミュニケーションについては、支援ミーティングやヒアリング、チェックリストを活用し、活性化を図っており、今後も話しやすさと適度な緊張感のある関係性を保てるよう努めていく。キャリアパスに応じた研修については、人員体制に配慮しながら、可能な限り参加を促している。また、各自が自身の役割を再確認する機会の必要性も感じている。

処遇・評価・人事考課案については、年度内に検討を行ったが、実施は次年度へ持ち越しとなった。特定技能実習生の研修は、それぞれに合わせた方法に調整しながら進めており、今後は得意分野を活かした役割の付与にも取り組んでいく予定である。

e. 総合的かつ効果的なリスクマネジメントの実施

今年度も新型コロナウイルスやインフルエンザB型の感染があったが、職員の尽力と感染後の迅速な対応により、比較的短期間で収束させることができた。今後も、利用者感染症から守ると同時に、支援体制を維持するために職員を守る視点から、BCP(業務継続計画)の見直しを進めていく。

リスクマネジメントに関しては、災害対策として避難訓練や炊き出し訓練、各種研修を定期的実施してきた。今後も必要に応じて見直しを図りながら、継続して取り組んでいく。

f. 地域とのつながりを意識した取り組みの展開

新規事業については、現時点では具体的な取り組みには至っておらず、来年度の理事会での承認を目指して準備を進めていく予定である。

ボランティアや実習生の受け入れについては、計画通りに実施することができた。相談支援事業についても同様に、計画通りに進めることができた。

一方で、ホームページの更新は滞っている状況が続いており、今後は更新頻度や情報発信の魅力についても引き続き見直していく。

g. 関連法令、地域情報等の情報収集と対応

外部研修については、現時点で必要な内容や今後必要となるテーマを踏まえ、適宜実施することができた。

内部研修についても、会議日や夏季研修を活用し、定期的な実施する体制が整っている。

h. 採用活動の強化

採用活動については、大学への巡回訪問は実施できなかったものの、セミナー等への参加や訪問を行うことができた。福祉課の廃止や定員割れが進む中、大学新卒者の採用はますます困難になっているが、関係構築の意味も含めて、今後も大学等への訪問を継続していく予定である。なお、高校新卒者の採用については、今年度は見送ることとした。

* ケース会 *

高齢化への対応を視野に入れつつ、他の年代の利用者の特性やニーズも大切にしながら、「自分に合った生活を送れる場所の提供」「個性に合わせたサポート」「利用者の変化を捉える観察力と適切な記録」を柱として、日々の取り組みを進めてきた。その成果の一つとして、昨年度に新たに入所した3名への支援では、限られた情報の中でそれぞれの利用者の特性に寄り添いながら支援を行い、職員の努力が実を結んで良好な結果につながることができた。

また、一年間を通し、高齢化等による利用者の状態変化が続く中で、その都度、支援方法や食形態の見直しを含めた必要な対応を、他部署と連携しながら柔軟に実施してきた。その結果、生命に関わる事故を未然に防ぎつつ、日々の支援を継続できている。

しかしながら、すべての利用者のニーズに応えられているとは言い切れず、健康と安全を最優先にしつつも、できる限り希望を尊重したいという葛藤が常にある。こうした課題について議論を重ねる中で、虐待やグレーゾーンに該当する支援を減らし、より透明性の高い、クリーンな施設づくりを目指すことが重要であると考えている。

今後も、利用者の意向を丁寧にくみ取りながら、職員間での対話を重ね、より良い支援を追求していく。

1. 年間目標

a. 利用者のしあわせ、変化を考えた支援の展開

- ・利用者がグループホームや就労を見据えた外部実習の機会を得られるよう支援を行った。
- ・実状に即した支援や日課の変更について、一部は実施できたものの、来年度も引き続き改善が求められる。日中活動、食事、入浴、男女間の支援のバランスなど、課題は多岐にわたっている。
- ・高齢化による利用者の変化に合わせて、食事提供、おやつ、外出の在り方等の見直しを行った。
- ・利用者概況や利用者台帳、危険一覧の更新・確認を行った。

b. 利用者を深く理解するため視る目を養う

- ・毎月の高齢者カンファレンスでケース担当者と連携しながら各課題について議論を重ねた。また、高齢期の課題に対する理解を深めるため、内部研修も実施した。
- ・身体拘束に関する会議を開き、その弊害について学びながら個別ケースを検討した。現状の大きな変化には至らなかったが、少しずつ取り組みを進めることができた。今後も専門性を発揮した継続的な対応が求められる。

c. 人材育成及び支援に対する達成感の向上

- ・月に一度、可能な限り男女別のケース会を実施している。それぞれの課題に重点を置き、集中して話し合う時間を確保できている。
- ・新たに特定技能実習生を3名迎えた。しかし、業務内容の理解・周知は容易ではないため、特定技能実習生や新任職員が理解しやすい手順や記録方法の整備が求められる。
- ・個別支援計画書とモニタリングの書式の見直しを行った。
- ・個別支援計画書やモニタリングの書類作成手順を改善し、郵送業務の負担を軽減した。その結果、支援に充てられる時間の確保につながっている。

d. 人権擁護委員会との協働

- ・人権擁護委員会を中心に、施設内でのグレーゾーン事例についてアンケートを使い、どうしたら良い支援につながるかを検討した。一つひとつの事例について前向きな話し合いができて、支援の最適解を確認することができた。
- ・夕方には支援員で支援の振り返りを行った。形式的になりがちのところはあったが、お互いを労い、良かった点を振り返る有意義な時間になった。目的の再確認を行うことで、さらに意義深い時間にできると感じた。

2、活動実績

月	ケース会内容	ケース担当
4	ケースの方向性の確認 利用者支援の現状検討 個別支援計画原案話し合い 高齢者カンファレンス	個別支援計画原案作成 (利用者・保護者アセスメント) 個別支援計画手立て試行 利用者別支援週案の作成 利用者支援状況記入開始
5	個別支援計画原案検討 利用者台帳・概況・支援一覧・危険一覧について の見直し、更新	利用者支援状況(経過報告)記入 利用者台帳・概況・支援一覧・危険一覧記入開始 利用者別支援週案提出
6	支援目標・実態のフィードバック 個別支援計画決定 高齢者カンファレンス	利用者支援一覧表完成 個別支援計画本人・家族提示 個別支援計画アセスメントファイル完成 利用者支援状況(経過報告)記入
7	支援目標・実態のフィードバック 高齢者カンファレンス	利用者支援状況(経過報告)記入
8	支援目標・実態のフィードバック 高齢者カンファレンス	利用者支援状況(経過報告)記入
9	支援目標・実態のフィードバック 高齢者カンファレンス	利用者支援状況(経過報告)記入
10	前期モニタリング総括検討 (男女別ケース会) 支援目標・実態のフィードバック 高齢者カンファレンス 支援目標経過確認・後期目標検討	支援上の問題点の確認作業 利用者支援状況(経過報告)記入 経過報告書前期総括提出 前期モニタリング総括送付 後期支援目標送付
11	支援目標・実態のフィードバック 高齢者カンファレンス	利用者支援状況(経過報告)記入
12	支援目標・実態のフィードバック 高齢者カンファレンス	利用者支援状況(経過報告)記入
1	支援目標・実態のフィードバック 高齢者カンファレンス →感染症流行のためケース会議は中止、議事録の回覧のみ	利用者支援状況(経過報告)記入
2	支援目標・実態のフィードバック	利用者支援状況(経過報告)記入 経過報告書後期総括提出 利用者台帳・概況・支援一覧・危険一覧提出 アセスメントの更新
3	後期モニタリング総括検討 (男女別ケース会) 年度のまとめ	後期モニタリング総括提出 支援上の問題点の確認作業 後期モニタリング総括送付

* 生活支援グループ *

2024年度の生活支援グループでは、「利用者の日常生活の楽しみ」を重視した活動を行ってきた。特に、利用者が楽しみにしているレク外出では、希望を計画に反映できるよう、丁寧な聞き取りを徹底した。また、近年実施していなかった活動や新しい活動を取り入れることで、内容をより多彩なものにした。

コンビニ外出では、メンバー変更などを行い、安全を最優先にしながら行った。しかし、利用者の高齢化や支援度の重度化により、さまざまな課題が生じている。今後の方針については、施設全体で検討する必要があると改めて認識した。

そのほか、創作活動、祝祭日のおやつ作り、月に1回のネイル活動などを実施し、利用者の日常生活に楽しみを提供する取り組みを行った。

生活支援グループの大きな役割として、利用者の衣食住や生活上の業務管理にも取り組んだ。その過程で、業務内容の見直しや他セクションとの連携も進めた。

これらの取り組みの中で、「利用者の高齢化」「施設全体の支援度の重度化」「個別対応の増加」といった課題が大きな障害となる場面が多かった。これらの課題は、いずみの家の今後のあり方に大きな影響を与えるものである。利用者の日々の生活をどのようにより良くしていくかを考え続ける必要がある。

1. 年間目標

a. 日常生活の楽しみになるような活動の計画・実施

主にレク外出、コンビニ外出、創作活動を通して利用者の生活のモチベーションや楽しみになるよう計画した。しかし、利用者の嚥下機能や身体機能の低下により利用者本人が希望した活動が難しい場合もあり、今後外出における基準を整備する必要性がある。施設内に季節感を取り入れるため季節に沿った創作活動を行ってきたが、それ以外の活動が手薄になってしまった。

b. 日課の中での業務の整理

生活の日を設定し、清掃・点検等、生活上における業務をできる時間を作った。また、支援の中で行っている清掃業務について、見直しを行ってきた。後方支援職員にも生活上の業務を依頼した。しかし連携が十分に取れていない部分も多く、来年度以降も生活支援グループが中心となり割り振っていきたい。また業務の整理は行えておらず、業務の多さという課題は残ったままとなってしまった。

c. 衣・食・住に関する支援の管理

利用者の衣食住の管理を行ってきた。清掃業務の見直しや生活の日の掃除を通して利用者の生活空間の衛生を保てるよう努力してきた。全体的に生活支援グループからの発信ということが少なくなってしまう、来年度以降はケース会とも連携を取り発信をしていきたい。

2. 活動実績

<主な活動>

レク外出(年3回)

コンビニ外出(週1回)

生活の日(そうじ)…7月、8月、9月、10月、11月、12月、2月、3月

生活の日(理美容)…4月、5月、6月、7月、8月、9月、10月、11月、12月、3月

* 日中活動グループ *

今年度は、ニーズに応じた活動内容の提供を通じて「一人ひとりが輝く場」の創出を目指し、ケース会と連携しながら活動プログラムの見直しを行ってきた。具体的には、「運動量の確保(自然に身体が動かせる活動)」、「障害特性に合わせた分かりやすい活動内容」を重視し、ワークシステム(利用者にも職員にも分かりやすい手順による作業)を提供してきた。

年度の途中からは、運動量の確保という面でやや縮小傾向となったが、継続して取り組んできた「分かりやすい動画の使用」や「リサイクル活動の構造化」については、大きな成果が見られた。

屋内活動においては、リハビリや自立課題に力を入れてきた。理学療法士による直接的な施術の時間には限りがあったものの、専門性のある関わりを持てるようになってきている。

午後の活動である「個別活動」(施設周辺の散歩)については、熊の目撃情報により一時的に活動が制限される状況もあったが、冬季より再開している。

1. 年間目標

a. ひとりひとりのニーズに応じた活動内容の提供

- ・ ケース会と連携し、屋外活動の見直し、ケース担当からの発信を取り入れた。
- ・ 分かりやすく、運動量の確保と充実感を持って取り組める活動内容に変更した。タブレット端末でタイマーや音楽を使用し、時間の経過や活動と休憩のメリハリが理解できるようにしている。
- ・ アフリカンドラム、音楽療法は、コロナ前の月2回実施に戻している。
- ・ 自立課題については屋内活動の利用者を中心に取り組んでいる。今後も自立課題の導入を進めていくと同時に、ケース担当からの発信も推奨していく。

b. マンパワーに応じた余裕を持った活動の提供

- ・ 高齢化に対応して屋内の職員配置を厚くしている。個別対応や安全面等の確保は確実に行った。
- ・ 薪の袋詰めや納品、木工等の活動準備の時間は、昨年度から職員配置の都合上縮小となったが、できる範囲で取り組んだ。

c. 全体のバランスを考慮した活動の提供

- ・ 午後は個別活動の時間として、屋外の散歩を行った。安全確保のために、男女1名ずつ付き添いを行い、気分転換の一環となっている。畑は年度始めに返還している。
- ・ 屋外、屋内の利用者・職員配置の見直しを行った。結果的に屋外グループに移行する方が増えている。
- ・ 週間予定等のフォーマットを業務改善担当と見直し、より効率的に作成できるようになった。これまで全体的に情報量が多くわかりづらかったため、シンプルにわかりやすい内容としている。

d. 活動提供に関しての他セクションとの検討・調整

- ・ 営繕と連携し、中庭にひまわりを植えて、施設内からも眺められるようにした。
- ・ 織りや木工に関しては、ボランティアの協力もあり、製品の作成とイベント(織りのなかま展)での販売につながられた。
- ・ 暑さ・寒さ対策、また安全に作業を行えるように作業着や靴の点検、ピロティの避難経路の確保などを協力して行った。

2. 活動内容についての報告

1) 日中活動(プログラム)

①おくがいグループ

生産的な活動から、「分かりやすく」「運動量の確保」を目的とする活動に移行した。

②おくないグループ (散歩後)

屋外で15分歩き、屋内で個別の活動を行った。利用者同士の相性にも配慮している。

③おくないグループ

高齢期の利用者、リハビリを必要とする利用者等に対応するため、職員を配置している。

織りの活動に加えて、個別の利用者ごとに自立課題的な内容での取り組みを進めている。

	月	火	水	木	金
9:15	-	体操 インフォメーション	体操 インフォメーション	体操 インフォメーション	-
午前 10:30	近隣外出	活動プログラム 個浴	活動プログラム 個浴	活動プログラム 個浴	音楽活動 個浴
午後 13:30	カラオケ 入浴	入浴 施設周辺散歩	入浴 施設周辺散歩	入浴 活動準備の時間	入浴

2) 高齢化対策・リハビリ・機能訓練

理学療法士による個別の施術、リハビリメニューの充実を進めてきた。午前、午後に専用枠を設け、個別対応により取り組めるようにした。

3) 余暇

音楽活動

アフリカンドラム、音楽療法(講師)

インフルエンザの流行等で、お休みする期間もあったが、充実した活動が行えた。秋の交流文化祭や障害者芸術文化祭では、発表の機会にも恵まれた。アフリカンドラム・音楽療法どちらもメンバーを限定せずに参加している。

4) 生活技術・知識向上活動

自治会活動はレク的な活動を中心に行った。皆が「楽しめる」内容を、役員さんを中心にして考えた。

今年度は、2回投票所(白州支所)まで出向ている。14名の利用者が不在者投票を行っている(事前に選挙公報等で候補者を確認する会を設けている)。

＊ 看護部 ＊

新型コロナとインフルエンザの感染症、それぞれのクラスターが発生した年であった。対策をしても感染拡大する状況に脅威を感じたが、重症化した利用者がいなかったことが幸いであった。
多職種連携、施設と医療の連携の重要性を感じた1年であった。

1. 年間目標

a. 疾病の早期発見、早期治療

日頃の観察や報告、定期健康診断から、受診や治療に繋がられている。入院・手術の必要な利用者もいたが、一連の治療が出来た。

b. 健康維持・増進、高齢化に対応するケアの向上

利用者の支援度が上昇する中、職員のマンパワーは不足していくという多難な状況にあるが、その中でも出来ることを模索して実施している。摂食嚥下機能評価を実施し、適宜食形態変更を行った。

c. 利用者のための介護予防

理学療法士が支援業務に就くことが多かったため、想定していた機能訓練を全て実施することはできなかったが、身体機能低下のある利用者には日常のADL介助の方法を支援員に繰り返し指導し理解に繋げてもらった。

d. 感染症および安全対策の向上

継続できる感染症対策を実施し、県の感染症ポータルサイトからの資料の掲示や注意喚起をしている。クラスター経験から、BCPを見直し中である。

e. 衛生的な環境の整備

感染症対策としての施設内の消毒や衛生に留意している。

2. 活動実績(延べ人数、代理受診含む)

月	嘱託医診察 (内科)	嘱託医診察 (歯科)	精神科診察 (検査)	体重測定 血圧測定	定期健診 (春・全般)	定期健診 (秋)	耳鼻科	皮膚科	その他	
4月	24	20	22	31			2	16		* 整…整形
5月	20	18	19	31	31		2	17		* 泌…泌尿器科
6月	32	19	20	31			1	8		* 外…外科
7月	24	20	20	31			6	9	整1	* 神内…神経内科
8月	24	18	40	31			2	9	整1	* 救外…救急外来
9月	31	12	22	31			6	11		* 形成…形成外科
10月	22	16	33	31			2	11	泌2	* 眼…眼科
11月	37	13	23	31		30	2	11	泌2	
12月	28	13	19	31			1	6		
1月	35	11	19	31			1	7	整1 外1 泌1	
2月	30	15	19	31			0	5	泌2 神内1	
3月	17	21	20	31			3	9	救外1形成1眼2	

* 調理部 *

施設では、食中毒や感染症(例:COVID-19やノロウイルス)の予防のため、手洗いなどの基本的な衛生管理を徹底している。また、調理業務では各プロセスで適切な対策を講じ、今年度も食中毒事故を発生させることなく、安全で安心な食事の提供を実現することができた。

利用者の皆様にとって、食事が楽しくおいしい時間となるよう、季節感を取り入れた食事の提供に積極的に取り組んでいる。嗜好調査や誕生日メニュー、選択メニューを実施することで、一人ひとりの嗜好に合った食事を提供する努力を続けてきた。その結果、多くの利用者の笑顔が見られたことが、大きな成果といえる。

さらに、高齢者の皆様が安心して楽しく食事を召し上がれるよう、介護職や看護職との連携を得て、研究や試作を重ねた。加えて、健康維持のため、一人ひとりのニーズに応じた栄養補助も行っている。

*(嚥下食)区分については下記参照

1. 年間目標

a. 利用者の状況、嗜好に合った食事の提供

利用者の嗜好を把握するために嗜好調査を実施し、好みを献立に反映した。選択メニューは毎月1回行い、今年度からは事前に写真を用いて希望を聞き取り、当日に提供する方法へ切り替えた。また、給食日誌を活用し、ケース担当や看護職員と連携しながら、一人ひとりの嗜好や食事摂取状況を把握し、献立作成に反映した。さらに、食形態の検討や見直しにもつなげている。

b. 家庭的な食事の提供

食材の価格が高騰し続ける中、施設では利用者に満足してもらえるサービスを提供するために、食材選びや調理方法、味付けに工夫を凝らしている。季節感を楽しんでもらえるよう、春には旬のタケノコ、夏には新鮮なトマトなど、季節の食材を活用している。

献立作成では、楽しさと美味しさの両立を目指しながら、栄養価や健康維持の重要性にも配慮している。また、利用者の誕生日には特別なメニューを提供し、喜んでもらえるようにしている。さらに、あまり好まれないことの多い魚料理や野菜料理にも独自の工夫を加え、幅広いニーズに対応している。

c. 衛生管理の研修、検討、徹底

「衛生チェック表」を活用し、徹底した衛生管理を実施することで、安心・安全な食事の提供を実現した。この取り組みにより、食中毒などの事故を未然に防ぐことができています。また、新任職員には衛生管理の重要性を丁寧に説明し、理解を深めてもらうよう努めた。さらに、今年度は朝調理・夜調理の業務標準を見直し、新任職員が円滑に業務を遂行できるよう、より実用的なマニュアルを整備した。

d. 高齢化に伴う食事の研究・提供

調理部会議、高齢者カンファレンス、職員会議などを通じて、さまざまな意見を集め、食事提供の見直しや改善策を検討した。本年度から、主食区分3を含む適切な食形態を提供し、利用者のニーズに応じた改善を進めている。特に、高齢者向けに加工された柔らかい食材を取り入れる工夫を行い、その中で厚揚げや漬物などを採用した。この取り組みにより、利用者から「おいしい」との声が寄せられ、残さず食べてもらえるようになった。また、調理職員の人数や調理時間に変更はなく、冷凍食材や加工食品を適切に活用している。

2. 活動実績

1) 誕生日メニュー 全員実施した。

2) 選択メニュー 毎月1度実施した。

3) 高齢化対策に伴う食事の研究

いずみの家の食事区分3についての研究・試作を継続。現在主食の区分3、ペースト食の提供を実施。

* 嚥下食の区分について

- ・区分1 容易に噛める
- ・区分3 舌で潰せる

- ・区分2 歯茎でつぶせる
- ・区分4 噛まなくてよい

* 地域交流担当 *

ボランティアに関しては、引き続き積極的な受け入れをしている。連絡ノートなどを用いて内容や考えを擦り合わせながら実施できているのではないかと考える。1月の「おりのなかま展」では、実際に職員と店頭で立ち販売している。また、地域行事への参加・計画に関しては、高齢化に伴い参加できる地域行事を精査しながら進めてきた。参加できる地域での参加・交流は年々減少していることは否めないが、可能な範囲で実施することができている。白州小学校・中学校を含む地域の公的機関や近隣地域地区長等には挨拶回りをして、継続した関係を保つことができていると捉えている。特に10月に行われた白州小4年生との交流会では、薪を作成し後日、小学生保護者への販売を行った。小学生が販売用ポップを作成してくれるなど流れのある活動につなげることができた。実習生への対応も同様に、予定していた通りの受け入れを行い、実習指導を滞りなく実施できた。

1. 年間目標

a. ボランティア、実習生への丁寧な対応

<ボランティア>

- ・ボランティアの受け入れは連携を取りながら実施できている。
- ・継続して専用ノートを活用し、要望の聞き取りを迅速に行った。
- ・翌月の予定を伝えてもらい、間違いがないように努めた。他セクションでは、特に日中活動グループ、調理部と連携し、受け入れを行った。
- ・ボランティアへは「織りのなかま展」に協力を仰ぎ、当日参加してもらった。
(取り組んでもらった内容は、織り、木工、手芸、その他(機関誌ちやいむ折り)など)

<実習生>

- ・実習中に手洗いや消毒マスクの装着をお願いした。
- ・受け入れは各大学の要望を最大限受け入れた。日程の作成や変更も柔軟に行った。受け入れのオリエンテーションを重視し、管理職を交えた評価を行っている。
- ・部分実習を実施し、実習生の主体性が披露できている。
今回も福祉関係の動画(障害特性について)を使うなど、中間反省会を継続した。
- ・実習中には障害者施設で働くことのやりがいや楽しさを伝えたり、終了時には将来の進路を聞き取りとるなど、就職につなげるように努めてきた。

b. 地域と深化した交流及び行事の進行管理

- ・地域行事や交流の継続を行ってきた。
- ・前沢区長、4組組長、消防団と連絡を取ってきた。清掃活動時は、用務職員が平素より清掃活動を実施している。
- ・地域団体との連絡はもれなく行ってきた。白州小学校4年生との交流会では、薪を作成し後日販売に至るまで流れのある活動につなげることができた。
- ・行事の進捗状況の把握をしている。

2. 活動実績

①ボランティア延べ人数	81名(6名)
②教育実習生受け入れ延べ人数 医療従事者の受け入れ	9名(帝京学園短期大学、山梨学院短期大学) 2名(武川診療所)
③その他交流会や外部行事への参加	山梨県障害者芸術文化祭 山梨県フライングディスク大会 サポート山梨交流文化祭 白州文化祭 織りのなかま展(ラザウオーク甲斐双葉にて)

* 人権擁護委員会 *

2023年度の虐待案件を受けて、施設内での支援方法を見直すためにグレーゾーン支援(不適切な支援と思われるもの)の聞き取りを実施した。その結果を基にグループごとに話し合いの時間を設け、多くの支援内容を見直し、共有することができた。これにより意識の変化も感じられた。しかし、これで終わりにするのではなく、日々虐待につながる芽を摘むために職員同士で相互点検を行いながら、支援内容を見直ししていく必要がある。また利用者と職員双方にゆとりのある支援を実践するために、話し合いや行動規範のチェックなど地道な取り組みを継続していく。身体拘束ゼロを目指す取り組みでは、改善への一歩を踏み出すことができた。一部の取り組みから施設全体に広げて課題を共有し、実践していくことが求められる。

1. 年間目標

a. グレーゾーンの見直し、より良い支援への転換

職員会議日に施設内での事例を基にした「グレーゾーン」に関する研修を実施し、参加者全員で話し合うことで、支援方法の共有や見直しを行った。これにより、支援に対する最適解を確認し合った。また、苦情相談窓口やオンブズパーソンの活動を定期的に行った。特に外部のオンブズパーソンによる対応には毎回多くの人が面談を希望している。

b. 身体拘束ゼロに向けた取り組み

定期的に会議を開催し、年3回実施した。その結果をケース会議を通じて共有してきた。身体拘束事例をゼロにすることは叶わなかったが、少しずつ改善を進めることができています。引き続き、専門性を発揮した対応が求められる。

12月には山梨県権利擁護センターより講師を招き、虐待防止や身体拘束に関する職員全体研修を行った。

c. 職員同士が相互点検、褒め合える風土の推進

主に夕方の「反省会(振り返りの時間)」として根付いている。今日の目標や良かったこと、こうすれば良かった点などを振り返る時間として確保できている。課題としては形式的になりがちであり、目的を再確認する必要があると思われる。また、定期的に人権チェック表や行動規範チェック表を用いて、個々での振り返りを実施している。

2. 活動実績

・苦情対応窓口(毎月)

・オンブズパーソン(4月18日、7月24日、10月23日、1月22日)

・身体拘束に関する仕組み(記録の整備)と事例の検証(毎月)

・行動規範チェック表(8月、1月)、人権チェック表の実施(4、6、9、12月)

○ミニ人権研修

グレーゾーンアンケートの実施

5月:「より良い支援を目指すために①」

6月:「より良い支援を目指すために②」

7月:「より良い支援を目指すために③」

9月:「より良い支援を目指すために④」

10月:グレーゾーン事例を各自のワークとした。

11月:「10月分のグレーゾーンのまとめ」

○夏季研修

8月23日、9月20日:「利用者の思い・気持ちに近づいてみましょう(意思決定支援に関わる内容)」(グループディスカッション)

○外部講師研修

12月13日:虐待防止(身体拘束含む)研修、県障害者虐待防止センター(対象者:職員全員)

○虐待防止委員会(6月13日、9月12日、12月12日、3月6日)

○身体拘束適正化委員会(7月11日、10月10日、1月16日)

* 安全管理委員会 *

昨年度に引き続き、事故・インシデントの報告及び処理・事後対応がスムーズに実施できており、来年度以降も安定して運用できるよう注力していきたい。また、他部署との連携においてはケース会との連携を重視し、事故・インシデント対策の方針決定を迅速に行ってきた。また、その他の部署との協力も事故対策において欠かせないものであり、今後もこの連携関係を維持していくことが重要だと考えている。

新しい取り組みとしては、これまでは実施してこなかった一歩踏み込んだ事故対策として各種マニュアルやガイドラインの策定を行った。(詳細は下記参照)

一方で、改善点としては防災倉庫の点検が十分に行き届いていない状況があるため、来年度中に倉庫内の備品の点検見直しを行い、さらなる管理強化を行っていく。

1. 年間目標

a. 効果的かつ実現性のある安全管理

例年通り、スムーズな事故・インシデント報告の処理を通して、迅速なリスクマネジメントに努めてきた。事故・インシデントの件数については、昨年度の予想通りほぼ横ばいとなり、今後は事後対応だけでなく事前の対策にも重点を置いていきたい。

投薬事故については、件数や重大事故をコントロールできている。しかし、気の緩みからの手順の不徹底が見られるとの指摘もあり、定期的な投薬手順研修や現場での徹底した指導が必要と考えている。

b. 職員への安全教育及び保護者への安全管理に関わる情報の周知

今年度は「①利用者リスク事項一覧」の見直しを行い、「②保護者への事故報告マニュアル」「③保護者への施設内における安全管理システムについてのお知らせ」を作成を行った。①②についてはすでに運用しているが、③については来年度6月の保護者会での説明を予定している。

職員への安全教育については、見守り及び投薬手順のマニュアルを通しての研修のほか、現場での直接の指導を行っているが、人材の多様化からの難しさも見えてきている。

c. 継続的な防災対策の実施及びBCPに基づいた防災訓練の実施とPDCAサイクルに基づいた見直し

防災訓練の実施については昨年に引き続き、委員内の人員に見合った回数・内容で予定通り実施してきた。来年度も同様の回数で実施を予定しているが、必要に応じて追加の研修や防災訓練も検討する。

防災用倉庫の非常食管理については調理部と連携して管理を実施。用具を管理している第2倉庫については、安全管理委員会で管理を行っているものの点検が不十分となっており、来年度中に総点検及び清掃、備品の追加を行う。

d. 他部署と連携したリスクマネジメントの継続

①日中活動グループとの連携では、作業場所の点検及び危険個所のチェックを行い、改善箇所について日中Gや各担当にフィードバックを行っている。②看護部との連携では、感染症対策訓練や情報の周知を行っている。③ケース会との連携では、利用者の安全対策の具体案を提示し、迅速な対応を行っている。④生活グループとの連携では、適宜、利用者の生活環境の見直しを行い、安全確保に努めている。⑤人権擁護委員会との連携では、利用者の人権侵害の恐れのある事例に関しての報告を行い、適切な対応を検討している。

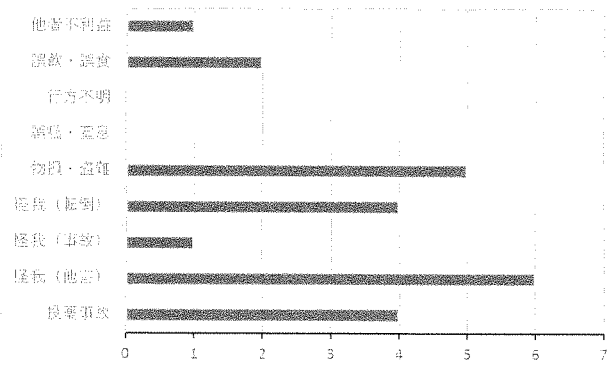
2. 活動実績

- ・各報告書式の随時改善、報告基準の見直し(事故・軽度事故・インシデント)
- ・事故、インシデント報告の分析及び対策の提案
- ・ケース会との連携(事故、インシデント事例の報告、共有)
- ・非常用倉庫の管理、調理部と連携しての非常食管理
- ・防災備品の購入と整理
- ・施設内危険個所チェックおよび設備の安全チェック
- ・作業場所及び作業着点検の実施、改善の指示
- ・職員連絡網の修正および周知、非常時連絡訓練
- ・Linkit(ビジネスチャット)による情報共有
- ・所轄消防署への防災訓練の実施報告
- ・関係機関との協力関係の維持
(前沢区4組、消防団、北杜市白州支所、韮崎消防署白州分署、北杜警察署)
- ・利用者の公衆浴場及びプール利用におけるガイドラインの運用・見直し
- ・BCP(事業継続計画)の見直し

2024年度 『事故』 統計・分析

	投棄事故	怪我（他害）	怪我（事故）	怪我（転倒）	物損・盗難	誤嚥・窒息	行方不明	誤飲・誤食	他者不利益	
4月	2	1								3
5月					2				1	3
6月	1				2					3
7月										0
8月										0
9月	1	1		2						4
10月				1						1
11月		2			1					3
12月		1						1		2
1月			1							1
2月								1		1
3月		1		1						2
	4	6	1	4	5	0	0	2	1	23

2024年度 事故 統計

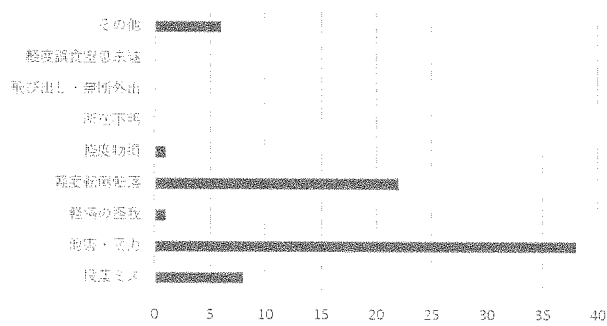


・昨年の29件から23件に減少。
・棄の誤投与については0件となり、投棄手順の徹底の効果が出ているといえる。
・特定利用者の施設外への飛び出しについては、昨年度に続き0件となっており、今後は施設内の施設箇所について、不要なものを撤去していきたい。
・他害行為については、ケース会を通しての対応ができており、減少傾向。今後もケース会との連携を密にとっていく。

2024年度 『軽度事故』 統計・分析

	投棄ミス	他害・暴力	軽傷の怪我	軽度転倒転落	軽度物損	所在不明	飛び出し・無断外出	軽度誤食誤飲未遂	その他	
4月	2	3		3						8
5月	2	1		2					1	6
6月	1	2								3
7月		3								3
8月		3	1	4					2	10
9月	1	2		2	1					6
10月		7		2						9
11月	2	6		3						11
12月		3							1	4
1月				2					1	3
2月		5		1						6
3月		3		3					1	7
	8	38	1	22	1	0	0	0	6	76

2024年度
軽度事故 統計



・昨年度の76件から76件と横ばい。今後は件数減少よりも、事故への対応や事前対策を重視していきたい。
・他害行為、投棄ミスについては、対策の効果が出てコントロールできている。
・高齢化を要因とする窒息未遂、軽度転倒転落については、昨年同様増加しており、今後も迅速な対応と事前の対策両面で対応していく。
・インシデント報告については、56件。本来はもっと膨大な件数があるはずだが、現状の中ですべての報告は難しく、「事故につながる可能性の高いもの」「支援や業務改善につながるもの」を優先して報告してもらっている。

* プロジェクトP *

空前の人手不足が続く中で、一法人・一施設の枠を超え、職員一人ひとりが多様な働き方を選べる環境づくりの必要性が高まっている。加えて、社会福祉法人として地域に根ざした活動を展開し、地域福祉の充実に貢献する責任も求められている。こうした背景から、「新たな社会福祉事業の創設」が施設方針として掲げられ、プロジェクトPが立ち上げられた。

プロジェクト立ち上げ当初と比べても、人材不足の状況はさらに深刻化しており、今後の事業展開を見据えた柔軟な働き方の実現と、職員が安心して働き続けられる環境整備が急務となっている。新規事業の立ち上げは、法人として職員同士が支え合い、より働きやすい仕組みを築いていくための重要な一歩である。

昨年度は、検討を重ねた結果、目指す事業の方向性を「児童発達支援施設」とすることを理事会にて正式に報告した。

本年度は、事業の概要や施設の規模、設立にかかる費用の見積もり、それに伴う資金調達の方法、人材確保に向けての取り組みについて検討を進める予定であったが、施設内の業務多忙や人員不足の影響もあり、十分な進捗は得られていないのが現状である。情報共有や意見交換の機会の一部で行われたものの、具体的な計画の策定には至っておらず、次年度以降の課題として引き続き取り組んでいく必要がある。

これらの取り組みを通じて、引き続き新たな福祉のかたちを模索し、法人全体の持続可能な発展に繋げていきたい。

1. 年間目標

a. 事業概要の策定

事業概要の策定については、北杜市の福祉計画にもあるように、児童発達支援センターの設立が地域のニーズとして挙げられている。しかし、設立に向けては定員数の確保、人材の確保、多額の設立費用など、いくつかの課題があることから、まずは小規模な児童発達支援事業として開始することを決定した。

取得可能な加算や提供するサービスの内容については、実際のニーズを踏まえ、現在も検討を続けている。

b. 設立、運営に掛かる費用の割り出し

設立予定地については、交通アクセスが良好で、法人本部からの距離も近い須玉地区を最有力候補としている。事業規模を児童発達支援事業に限定することで、土地取得や建設にかかる費用を抑えることは可能と見込まれるが、具体的な費用額についてはまだ算出できていない。

また、運営費や人件費、資金調達の方法についても同様に未確定であり、今後も継続的な検討課題として取り組んでいく必要がある。

c. 人材確保に向けての取り組み

人材確保については、現時点では具体的な取り組みには至っていない。職業安定所や福祉人材センターからは、福祉分野における求職者の数が少ないとの情報が寄せられている。一方で、県内で児童発達支援事業を展開している事業所からは、「児童分野の求人は、他の福祉事業に比べて比較的人材が集まりやすい」との有益な情報も得られており、今後の人材戦略を検討する上で参考になると考えられる。

d. 法人全体での情報共有

報告については、職員全体会議および理事会で定期的に実施しており、今後も理事を含む全体からの意見を反映させながら、新規事業の設立に向けた準備を進めていく。

* 自治会 *

今年度は、高齢な利用者や様々な障害特性を持った利用者全員が、無理なく安心して活動できる自治会を目指した。個々の力や特性に寄り添ったレクリエーションの考案や、食事形態への配慮を行うことで、幅広い利用者層の楽しみに繋げることができた。また、職員の配置不足や業務負担軽減の視点から、隔月の開催となったが、内容の拡充や、利用者の自己決定に重点を置くことで、満足度を保つことができた。

1. 年間目標

(役員)

- a. みんなで たのしく なかよくする じちかい
- b. みんなで きょうりよくする じちかい
- c. みんなで やさしく たすけあう じちかい

(職員)

- a. 利用者による利用者のための自治会を目指す
- b. 日々の生活の中で、自治会役員として自覚や責任感が持てるようにする
- c. 自治会役員・自治会員が楽しさを感じられるようにする

〔2024年度活動実績〕

- 5 月 総会・話し合い
- 7 月 レク大会・話し合い
- 9 月 レク大会・話し合い
- 11 月 紙すき体験・話し合い
- 1 月 新年会
- 2 月 選挙・話し合い

2. 年間目標について

- a. 利用者による利用者のための自治会を目指す
話し合いの時間を十分に確保することで、利用者主体の自治会を実現することができた。
利用者に対し自治会についての説明を行うことで、自治会の意義について認識の統一を図った。
課題としては、さらに利用者の意思決定が実現できるよう、合理的配慮の視点を取り入れていく必要がある。
- b. 日々の生活の中で、自治会役員として自覚や責任感が持てるようにする
自治会の準備として、掲示物の作成やレクリエーション使用品の運搬、活動内容の考案に携わるよう話し合いの場を設けた。当日運営に関しては役員全員に役割があるよう企画を行った。
- c. 自治会役員・自治会員が楽しさを感じられるようにする
能力や障害特性に配慮したレクリエーションを考案したことで、会員全員が参加することができた。
自治会開催が隔月となったが、その分話し合いの時間をしっかり持ち、会員から出た意見を企画に最大限反映させることで、個々の満足度を高めることができた。

* 相談支援事業 *

障害児者自身が望む自立した社会生活を支えることを目的とし、抱える課題の解決を行い、本人に合った適切なサービス利用ができるよう計画相談を作成し、一人ひとりの特性に合ったサービスが提供されているか、他に課題はないか定期的なモニタリングを行った。必要に応じて医療関係者・事業所・就労支援ワーカー・包括支援センター・成年後見人や保健所等関係機関や専門機関と連携し、障害者の意思や人格を尊重し地域で生活していくための支援を行った。

家庭環境の把握・生活・ニーズの変化に対応し、利用者の現状に即したサービスの利用に繋げることが求められている。利用者やその家族、またはキーパーソンとなる方との面談の実施だけでなく、各サービスの担当者にも意見を聞き、課題点や支援の方向性、サービスの必要性において共通理解に努めた。

行政機関や基幹センターとの連携、圏域の自立支援協議会・研修など積極的に活用し、地域生活拠点機能含め、スキルの向上・各機関との繋がりを強化し、地域の安心ある環境づくりに貢献した。

相談支援専門員としての資質の向上と専門的知識の習得を図るため、医療的ケア児等支援者養成研修に参加し、あらたな事業収入に繋げた。

利用者の状況

計画相談支援（作成件数） **870（件）** 昨年710件

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
計画	9	7	5	4	2	3	2	3	5	4	5	5	54
モニタリング	17	12	20	19	17	22	19	15	21	14	13	18	207
加算対応数	49	46	55	55	48	51	49	50	56	46	52	52	609

課題として

同一世帯の中に複合的な福祉課題を有する多問題世帯が多くなっている。多問題世帯への相談支援にあたり、関係する様々な分野の相談支援機関やサービス提供事業者間の調整を誰が行うのかについて、定まった考え方がないため、現状では多問題世帯に対するチームアプローチが円滑に進まないのが現状である。児童から高齢者まで世代を区切らず、また保健、医療等も含めて情報共有したり、うまく支援が繋がったケースを学んだりすることで、困難ケースにならないよう予防的な対策・支援体制の構築が必要とされる。

また、さまざまなケースに関わる現場レベルの関係者・支援者の人たちと、それぞれの立場から意見交換をする場を持ち、役割や情報共有を図り、それぞれができること・できないことをお互いに理解する場も必要とされる。

次年度に向けて

1. 収支バランス

昨年度の報酬改定にて高次脳機能障害の加算について、業務・算定回数など、加算という形で評価が得られるようになったため、積極的に取り込んで事業収入の一つとしていく。今年度、障害サービスを終了された方が5名おり、担当件数は5名減となる。次年度は新規利用者の積極的に受け入れ、今年度同様の収入を目指す。

2. 関係機関との連携、ネットワーク構築

行政・福祉・医療・教育等の関係機関と連携を図るとともに、必要な専門機関の紹介を行う。また、関係機関とのネットワークを構築し、当事者の地域生活を支えるシステム作りに協力・貢献する。

また地域生活支援拠点の機能を担う事業所として、連絡体制を確保し、緊急の事態に相談を受け各関係機関と連携し、必要な支援を行う。

3. 資質の向上と連携強化を目指した研修等への参加

支援対象者の障害や生活スタイルの多様化に対応していくため、支援を実施していく上で必要となってくる知識の付与・スキルアップを目的に様々な研修・交流会等に参加する。